
あるアスリートのキャリアトランジションに伴う アイデンティティ再体制化について

—生涯発達心理学の視点から—

小 島 一 夫

要約

本研究は、エリクソン（1959）の「アイデンティティ形成は、青年期に始まり終わると言うものではなく（中略）その大半が一生涯を通じて続く無意識的な発達プロセスである」の理論に基づいた生涯発達心理学の視点に立って、ライフサイクルの中で現役を引退し、キャリアトランジションすることが、あるアスリートにどのような意味を持ち、そして、どのような引退後の適応過程を辿ったかを元アスリートへのインタビューをもとにアイデンティティ再体制化の過程について豊田・中込（1996）、豊田（1999）の仮説の検証と考察を（1）競技引退に伴うアイデンティティ再体制化のプロセス、（2）社会化予期と時間的展望について、（3）競技引退がその後の職業期危機に与えた影響、という3点に絞って行った。そこから以下の4つの点が推察された。

- （1）競技引退に伴うアイデンティティ再体制化のプロセスにおいては5つの過程がある。
- （2）社会化予期と時間的展望については事例により異なる。
- （3）競技引退がその後の職業期危機に与えた影響については、競技期間中におけるアスリートのアイデンティティ確立の心理・社会的背景（性差、投入の個人差、種目、競技実績、競技の知名度等）とトランジションに伴う社会化予期・時間的展望が密接に関係している。
- （4）アスリートのキャリアトランジションはアイデンティティを形成する過程の特殊性と相まって、その難しさがある。

キーワード：キャリアトランジション、生涯発達心理学、アイデンティティ再体制化

1. 緒言

サッカーで日本を代表する世界的アスリートとして活躍した中田英寿氏が2006年7月3日の彼自身のホームページで、これからは世界各地を旅して見聞を広めながら自分のできることを探したい。またサッカー界の今後の発展を願っているし、貢献もしたいと述べている。そして、現実には彼はそれを実行している。中田選手の場合、「ワールドカップ」を選手としてのゴールとし、これを「人生の通過点」としながら世界各地の旅（モラトリアム）を経て次のトランジションを考えているといえる。また一方では、引退したアスリートの犯罪や不祥事がよく報道される。この事実は、かつて高い評価を得ていた人間が、それを失った後の人生と向き合うことの難しさを教えているともいえる。

トップレベルに至ったほとんどのスポーツ選手の場合、競技生活あるいは選手生活は、10歳前後から始まり、10数年間の専心的な競技への取り組みを経て20歳代にピークを迎え、そして20歳代にアスリートとしてのキャリアを終える。この間、競技に大きく自己投入しているアスリートは社会生活における様々な選択の中で競技を最優先事項とし、また、そうならざるを得ない状況下に置かれている。つまり、アスリートが高い競技レベルを維持していくためには、「競技者以外の何者であることも許されない」状況がそこに存在している。そして、高橋潔（2007年）は、アマチュア競技の場合、職業的キャリアの問題を考えれば、それは競技選手としてのキャリアの「引退」から始まると言及している。

こうしたアスリートの競技引退を課題とした先行研究に関しては、豊田・中込（2000）が理論的研究と実証的研究の二側面から整理し、その特徴や限界を明らかにしながら、アイデンティティ再体制化の観点から引退後の適応を捉え、そこに含まれる問題を究明していくことの有効性を検討している。その中で、アスリートのキャリアトランジションに関わって生起する問題をテーマとした研究はスポーツ科学の領域においてはまだ少ないとしながら、キャリアトランジションの研究の推移の概要については豊田（2007）が次のようにまとめている。このことがスポーツ社会学領域で取り上げられたのが1950年初頭のことである。そこでは、プロボクサーが引退後に引き起こす心理・社会的問題の深刻さ（チャンピオンであったことによる社会的横柄さ、巨額なファイトマネーを獲得したことによって形成された無謀な金銭感覚、様々な形での社会不適応など）にスポットを当てていた。その後、1980年代に入ると、スポーツ心理学の領域でも取り上げられるようになっていった。理論的研究では、引退を正確に捉えることのできる「理論的枠組み」(theoretical framework)を模索したようである。特に、キャリアトランジションは、アスリートにとって重大なアイデンティティ危機 (identity crisis) であり、そこで経験する諸々の不適応は心的外傷 (trauma) へと発展する可能性を有している。そのような危機理論 (crisis theory) を背景に、社会老年学 (social gerontology) や死亡学 (thanatology), 成人移行論 (adult transition theory) など様々な研究成果を利用したが、当該現象を捉える上での限界が指摘された。すなわちここでは、アスリート特有の問題として詳細な分析を可能とする理論モデルの構築が急務とされた。一方、実証的研究では、プロフェッショナル・アスリートからアマチュア・アスリートへと研究対象が拡大され、同時に、そこで扱われる研究課題が三段階にわたって変遷していったことを読み取ることができる。すなわち、①キャリアトランジションに関連する問題の把握（キャリアトランジションに伴う心理社会的問題とは何か）②キャリアトランジション後の生活適応に影響する要因の同定（キャリアトランジションに寄与することは何か）③具体的介入方略の探求（キャリアトランジションを支援するプログラムはどうあるべきか）、といった課題の変遷を遂げた。そして、1990年代には、これらの研究成果を背景に、欧米諸国を中心にアスリートのセカンドキャリア問題への専門的介入・支援を具体的施策として構築・運営される段階へと至る。

豊田・中込（1994）は、引退して3年以上を経過した元アマチュア・アスリートを対象とし、アイデンティティ再体制化の観点から類型化を行った。その中で、特にこれ以上競技を継続することができないことに予め気づくこと（社会化予期）と引退後の人生設計に置いて具体的な計画を立て

ること (将来展望) が、引退後の社会生活への積極的なかかわりを規定する要因であることを確認した。このことについて豊田 (1999) は 2 事例を挙げて検討している。

本研究では、エリクソン (1959) の「アイデンティティ形成は、青年期に始まり終わると言うものではなく (中略) その大半が一生涯を通じて続く無意識的な発達プロセスである」の理論に基づいた生涯発達心理学の視点に立って、ライフサイクルの中で現役を引退し、キャリアトランジションすることが、あるアスリートにどのような意味を持ち、そして、どのような引退後の適応過程を辿ったかを元アスリートへのインタビューをもとにアイデンティティ再体制化の過程について豊田・中込 (1996)、豊田 (1999) の仮説の検証と考察を試みた。

2. 方法

- (1) 調査対象：全日本チャンピオン、ナショナルチームに属し世界選手権大会に出場した経歴を持つ元アスリート
- (2) 調査期間：2007年4月～2007年8月
- (3) 調査方法：インタビューは、元アスリートの競技日誌を提示してもらい、時間経過に従って体験した主要なエピソードを取り上げるようにし、半構造化面接を (約30分×5回) を実施した。そこでは、いつ、どのような行動レベルでの変化を起こし、それを彼女がどのように受け止めたかについての会話を、本人の承諾を求め、カセットテープに収録した。インタビュー初回時には、ライフライン〈図1参照〉の作成を求めた。

3. 事例提示

(1) 事例提示の仕方

本研究は、1事例について報告する。まず、事例の概略並びに調査時点で記入されたライフライン (図1参照) を掲載した。そして、競技に傾倒し競技期、引退のきっかけとなる出来事から実際に競技引退を向かえるまでの移行期、引退後の社会生活を含む再適応期という時間的経過に配慮しながら事例を提示した。また、事例中に示される「 」には、当事者の逐語を示した。ちなみに、事例提示については対象者に承諾を得た後、論文掲載に至っている。

(2) 事例A

「ヘルパーをしながらジュニアの指導にあたった元全日本チャンピオン」

Aの概略：全日本チャンピオン、ナショナルチームに属し世界選手権大会に出場 (団体5位入賞)。

大学卒業後、郷里の実業団チームに就職した。そこで対人関係に悩んだ末、2年で辞め、大学時代のパートナーと茨城の企業に再就職した。海外遠征をしながらアテネオリンピックを目指したが、不可能になったことで競技引退を決め、所属していた会社を退職した後、郷里に帰り、ヘルパーとして老人介護施設に住み込みで働いていたが体調を崩したことにより退職し、自宅療養中に後輩となる地元のジュニアのコーチをしはじめ、その後パートではあるがヘルパーの仕事に再就職した。〈図1参照〉

競技期：9歳でバドミントンを始め、県全体が全国的に見て高いレベルにあったこと、さらに入学

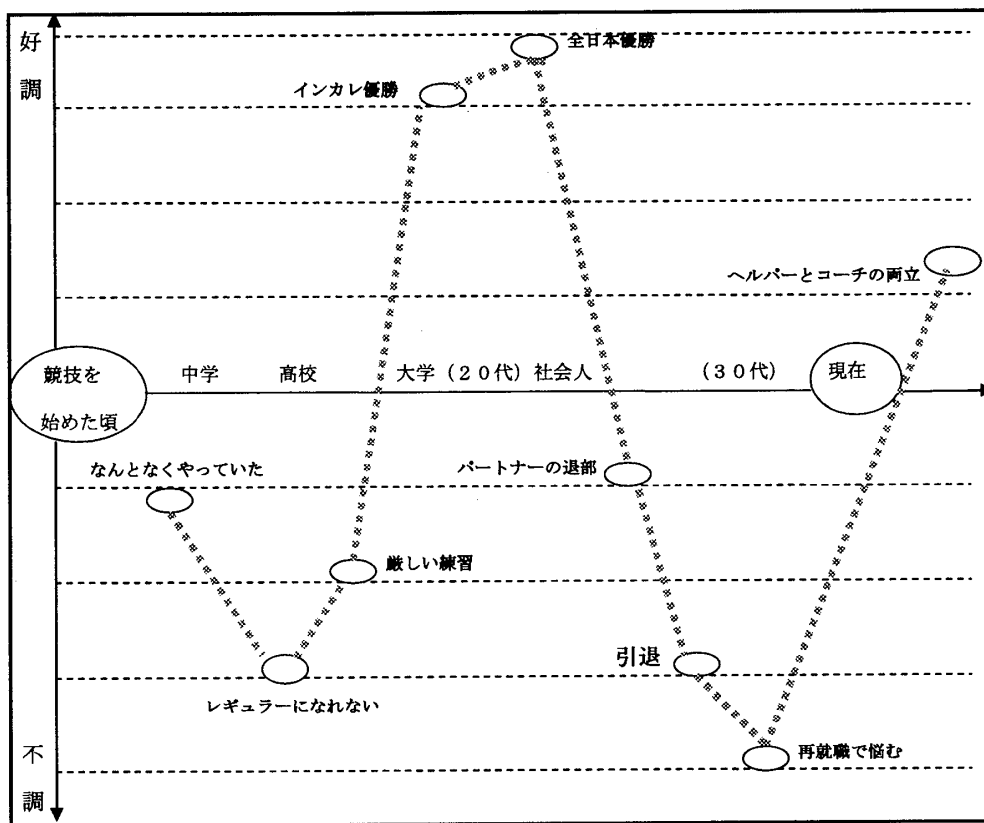


図1 事例Aのライフライン

した中学校が県下屈指の強豪校であったのに、さしたる強い勝つことへの執着心を持つことなく中学時代を送った。「全国大会に出場できなかったけれど、毎日が楽しかった。」という思い出がある。高校も県下で実績一番の名門校に進学した。「自分なりに、努力したつもりではいたのですが、後から入ってきた後輩にレギュラーの座をとられ、インターハイには個人戦どころか団体戦のベンチ入りもできませんでした。」就職しようか、進学しようかで悩んだ末、以前より福祉に興味を持っていたことから大学への進学を決めた。大学に入り想像を絶する練習の質と量に、当初困惑した。「ここはまるで陸上部じゃないか。」と思ったそうだ。また監督の口癖『2位は負けの代表だ』で、日々緊張感の連続であった。先輩に全日本の選手がいたのが、途中逃げ出さなかったことの一つに挙げられる。入学後半年で、何とか体力的にはついていけるようになった。まだそのころは、日本一がどんなものかを知る由もなかった。その年の10月、全日本学生選手権のダブルスで全日本の一員である先輩と組んで初めて日本一になった。そして4年の間に3度、同種目で優勝し、3年時には全日本のメンバーに入ることができ、団体の世界選手権（ユーバー杯）で5位入賞も果たした。大学卒業後、地元熊本県の実業団チームに入社し、2年目の年の全日本総合選手権大会女子ダブルスで優勝した。このまま順調な選手生活を送れると思った矢先、パートナーの引退問題や、それに伴い監督との不協和もあり、かなり精神的に落ち込んだ。そんな時、大学時代のパートナーも同じような境遇であった。そこで、二人は各々の会社

を退職して、大学時代の監督を頼り、もう一度日本一・オリンピックを目指すことになった。その後、2年間の茨城での選手生活で全日本総合選手権3位、ポーランド国際大会優勝等の記録を残すが、パートナーの思わぬ戦線離脱により、後輩とのペアを組むことになった。それでも頑張ったが、その年（26歳）の全日本総合選手権の準々決勝で負けた。準々決勝を振り返って、「徹底的に打ち抜かれて“もうだめだ”と思った。」と言う。

移行期：競技の引退を考えたのは、頑張ろうと誓ったパートナーが途中リタイアした頃からで、全日本総合の準々決勝敗退が直接の要因であるという。大会後、家族や友人と相談したが、結局自分自身で引退を決め、郷里の熊本へ帰り、ヘルパーの資格を取ることにした。2級ヘルパー資格の取得後、老人介護施設に住み込みで勤務した。そこで、不規則な勤務体制や慣れない環境での人間関係から体調を崩し、さらには腹部の潰瘍手術をした。この時期、好きな競技で選手時代を送っていたころを思い出し、「なんでこの仕事に就いたのか？」を繰り返し自問自答するようになったという。何とか気を取り戻しつつ、仕事に従事していたが、腹部に激痛が走り、再度の開腹手術を余儀なくされた。このことがきっかけとなり、介護施設を退職して実家療養に入った。

再適応期：実家療養をしながら、母校の中学校に出向いた際、白い羽根を無心に追っている後輩たちの練習の様子を見て「何か心を洗われる思いになった。」そこで、時より練習を見に行くようになった。そのうちに体調も回復してきたので練習に参加するようになった。仕事への復帰意欲も出てきて、ヘルパー1級の資格取得に努力し、見事資格を得ることができた。契約社員ではあるが、自宅から通える職場も見つかり、さらに母校のコーチの一員にもなれ、しばらく味わえなかった充実感を感じたという。そしてAらの指導の努力が実ってか地区予選、県予選、九州ブロック予選を勝ち抜き見事全国大会の出場権を得た。この時は「自分が優勝したときより嬉しかった。」全国大会では準々決勝までいったが、優勝することはできなかった。「コーチ1年目で何がなんだか分からなかったが、子どもたちの笑顔に救われた思いだった。」そして、コーチ2年目にさしかかり、技術指導より、生活指導面で悩んでいる。挨拶のできない子、「ありがとう」の言えない子、「すみません」の言えない子たちである。さらには、自己中心的な親への対応もある。しかし、また子供たちを全国大会という檜舞台に立たせようと日々、仕事とコーチの両立を目指して充実した生活を送っている。「私はバドミントンに助けられたから、バドミントンで恩返ししたい。」これからコーチとしての指導の中でまたいろんな事が起こるだろうが、オリンピックを目指して頑張っていた頃の自分を忘れず、前へ進みたいと澄んだ目をして言っていたのが印象的だった。

4. 討議

ここで挙げた事例は、様々な観点から理解することが可能である。ここでは、1) 競技引退に伴うアイデンティティ再体制化のプロセス、2) 社会化予期と時間的展望について、3) 競技引退がその後の職業期危機に与えた影響、という3点に絞って論ずることにしたい。

1) 競技引退に伴うアイデンティティ再体制化のプロセス

この事例Aの場合、競技引退を経て、その後の社会生活への移行はスムーズであったとは決していえない。Aは競技に取り組み始めた当初は、「日本一・オリンピック出場」という目標などは全く無く、中・高時代は単なるプレーヤー的意識しか持っていなかった。「アスリートとしての自分」を確立していくのは大学入学以降といえる。大学・社会人を通して「日本一・全日本入り」を果たした後、パートナーが変わったことや全日本総合で負けたことにより競技引退を迎えた。その後、ヘルパー（2級）の資格を取り再就職し、アイデンティティ再体制化に着手したが、体調不良等で退職することになり、それをかなえることができなかった（アイデンティティ拡散）。実家に戻り、静養中に母校の後輩の指導をしているうちに体調もよくなり、再就職への意欲も出てきて、ヘルパー（1級）に資格も取得し契約社員ではあるが再就職もでき、母校の中学校のコーチとしてアイデンティティ再体制化を果たしたといえる。つまり、競技引退を通じて【アスリート→ヘルパー】という移行を行い、その中では『アスリート→母校のコーチをしながらヘルパーをしている自分』というアイデンティティの再体制化を行った。

そこで、このように競技引退に関連して歩んだアイデンティティ再体制化については、表1に示すようなプロセスを見出すことができる。

すなわち、①：競技引退のきっかけとなる出来事（敗北体験）、②：アスリートである自分の歩みの再吟味と引退への方向付け（自信の消失と引退の決意）③：競技からの移行（キャリアトランジット）④：職場への傾倒（体調悪化と退職）⑤：再就職とコーチへの傾倒（地域社会における地位の確立）という過程である。

この事例の場合、競技引退を決意し、これを果たしていくプロセスの中で、ヘルパーとしての仕事に馴染めなかったことによりアスリートであった自分を見失いかけたが、コーチとして再び競技への傾倒を通して移行を果たして行っている。

こうして、事例Aは競技引退を通じて、決してスムーズな移行とはいえないが、現時点である程度の課題解決がなされているといえる。

2) 社会化予期と時間的展望について

事例Aにとって【アスリート→ヘルパー】という移行体験は決してスムーズではなかった。しかし、先述の通り競技引退に含まれる課題はある程度解決されていったのではないかと捉えることが

表1 競技引退に伴うアイデンティティ再体制化（拡散）の過程

段階	名称	事例内容と対応
①	競技引退のきっかけとなる出来事	敗北体験
②	アスリートである自分の再吟味と引退への方向付け	自信の消失と引退の決意
③	競技からの移行	キャリアトランジション
④	職場への傾倒	体調の悪化と退職
⑤	再就職とコーチへの傾倒	地域社会における地位の確立

できる。

Aの場合、新しいパートナーと望んだ全日本総合で敗退したことにより「もうこれ以上、競技を継続することはできない。」という社会的予期によって、引退行動が促進されたといえる。競技期後半においては「日本一・オリンピック出場」を目標に、ある程度の目標を立てて競技に取り組んでいた。しかし、これより先の人生を具体的に展望することは無かった。引退を決めたときから、所属企業での職場移行はできたのだが、「親元に帰りたい。」「ここにはいられない。」との考えで退職し、ヘルパーの道を選んだ。従って、それまでの自己の歩みを吟味し、自らの将来を考慮した上での移行ではなかったといえる。つまり、十分な時間的展望を伴った移行とは言い難い。そのことで、ヘルパーとしての仕事（職場）環境に馴染めず、退職することになった。しかし、実家療養が新たな社会化予期と時間的展望を持つこと（モラトリアム）^{註11)}になり、母校のコーチをすることによって、発達課題の解決が見られたといえる。

3) 競技引退がその後の職業期危機に与えた影響

Aの場合、調査時点において深刻な発達の危機（developmental crisis）、言い換えれば、アイデンティティ拡散（identity diffusion）^{註2)} 経験していたことが伺われる。

Aは、ヘルパーとして仕事に従事しながら、次のようなことを自問自答していたという。

「何でヘルパーという仕事に就いてしまったか。」「競技生活が懐かしい。」「苦しい練習に耐えて、日本一になったのだからこんなことでめげてはいけない。」「我慢だ。」Aはそんな状況の中で、アイデンティティの揺らぎを体験した。

Aの場合、発達段階の比較的早期から、主体的な意思決定体験が見られる。高校も自分で選び、大学も高校の監督の勧めを断って自分の行きたい大学を選択している。競技引退に際しても、社長の説得にもめらず、ヘルパーの道を選んでいる。それぞれの場面での傾倒がみられ、重要な意思決定場面においても主体性が認められる。Aのこれら一連の移行は、自己認識能力の範囲以内での選択が行われていることが伺える。つまり、調査時点において起きた危機の主な要因は、現状からの逃避とヘルパーの職についての認識不足にあるといえる。

以上の結果から、キャリアトランジションを通じて体験されたアイデンティティ拡散は、現状からの逃避とヘルパーの職についての認識不足からすぐに直面することになった。

そして、後輩たちの頑張る姿とかつての自分とを重ね合わせることで危機を脱し、現時点でのアイデンティティ再体制化をすることができたといえよう。

5. 検証と考察

まず、1) の競技引退に伴うアイデンティティ再体制化のプロセスについては、豊田（1999）は、4つの過程が認められるとしているが、本研究の事例においてはキャリアトランジションがスムーズに行われず、豊田の仮説にさらにひとつ増やすことになった。その要因については、先述した、現状からの逃避とヘルパーの職についての認識不足からのものであることは容易に伺え知れる。本事例の場合、女性であること、マイナー競技であることからくる周囲の関心度の低さ、さらには「競技者以外の何者であることも許されない」状況の期間が短かった等を考慮に入れなければならな

い。しかしながら、開腹手術の体験や実家療養期間中のAの心的苦痛と混乱は察して余りある。そして、この状況（危機）を打開できた直接の要因は、先述した「後輩たちの頑張る姿とかつての自分とを重ね合わせること」であろうが、競技引退後2年という早い時期に起こったことが、ある程度容易にアイデンティティ再体制化をすることができたといえる。このことについて中込（1993）は、スポーツ場面での危機の対処の仕方が、青年期にあるアスリートのアイデンティティ形成といった心理社会的発達課題への取り組みにおいても繰り返されることを指摘した。

つまり、競技に勝利するためには怪我やストレスといった危機への対処が必要になってくる。日本一になったことのあるアスリートはそれらの対処の仕方（スキル）をもっている。したがって、Aの場合、危機が2年以内という比較的短い時期におとずれたので、アスリート時代に獲得された精神的スキルを用いて対処することができたと推察される。

2)の社会化予期と時間的展望については、クックとロベルトソン（1991）の競技引退に関連した適応問題に焦点を当てている研究の中で、「自らが引退することを予期できたのか否かが、その後の適応に大きく影響する。」とする論述を受けて、豊田（1999）は、社会化予期はアスリートから次の生活への移行のスムーズさに貢献していることを明らかにしている。一方、時間的展望については、アイデンティティ再体制化における課題解決の程度を決定づけるとしている。しかし、本研究の事例の場合、本人の予期によって引退したのにもかかわらず、次の生活へトランジションが厳密にはスムーズにいかなかった。このことは、豊田（1999）のいうアイデンティティ再体制化の必要性は中年期以降にのみ起こることではなく、時間的展望の甘さを要因とする職場への不適応状態等から比較的早い時期に訪れることを示唆しているといえる。

3)の競技引退がその後の職業期危機に与えた影響について、豊田（1999）は、競技引退を通じて体験されてきたアイデンティティ再体制化によって積み残されてきた課題は、中年期以降に直面して、再び問い直されているとしている。この事例研究が、いずれも50歳代の元アスリート（男子）のものであり、本研究の事例は30歳代の元アスリート（女子）であることから、本研究からの検証は不可能と判断される。しかし、両事例研究から、競技引退がその後の職業期危機に与えた影響については、競技期間中におけるアスリートのアイデンティティ確立の心理・社会的背景（性差、投入の個人差、種目、競技実績、競技の知名度等）とトランジションに伴う社会化予期・時間的展望が密接に関係していることが推察される。

競技期間中におけるアスリートのアイデンティティ形成について中込（1993）は、「スポーツ場面における危機様態と職業決定における対処行動パターンの類似性」という側面から、スポーツ経験とアイデンティティ形成について検討している。そこでは、50名の面接資料をもとに、①積極的模索型（相互的）、②消極的模索型（短縮的）、③危機回避型（防衛的）、④未決・継続型（遷延的）、⑤平穏型の5つの分類し、その結果からアイデンティティの達成、早期完了、モラトリアム、拡散といった職業決定ステータス尺度との相関について検証している。このことが、次のキャリアトランジションの問題へと移行していくといえよう。

エリクソン（1959）はライフサイクルの各段階にはその段階において解決しなければならない固有の発達課題があるとし、8つの段階を提示した。エリクソンはエヴァンス（1981）との対話の中

で、青年期の発達段階のアイデンティティについて「相対的にみて無意識的な葛藤」と記述したことに付け加えて、青年期の終りに、確固たるアイデンティティが発達していなければ、次の段階へと発達していくことができないと言っている。また、岡堂哲雄（1981）はエリクソン理論の卓越性のひとつとして、ハルトマンの適応理論と同様に、平均的に期待される環境に対応する生得的な調整機能を仮定した点を上げている。つまり、彼の相互性（mutuality）の概念は、発達する個人とその人間的（社会的）環境との間の決定的な調整が相互関連的であることを意味している。この概念は、社会心理学的見地からパーソナリティを規定したレヴィン（Lewin, K.）の場理論（3）（（3）i）筆者（2004, 2005, 2006）が継続研究してきた社会化（4）（（4）き）Socialization）と共通性があるといえよう。これらの理論は、豊田・中込（1996）が競技引退の経験の中でさらなる発達や成長を期するために「何が求められるべきか」とする論点は、生涯発達論を拠り所とするところが大きいことを明らかにしたこと裏付けているといえる。

中込（2004）は、ロールシャッハ・テストプロトコルから、アスリートのパーソナリティ像を導き、競技環境の心的特徴を探っている。その中で、アスリートは一般人と比較して、競争意欲ならびに要求水準の高いことが考えられるとし、競技スポーツでは記録の向上や勝利を強く要求されており、典型的な達成指向型の状況であることを裏付けている。また、観念活動の固さや対象従属性が高いといったパーソナリティ特徴を明らかにしている。つまり、アスリートのアイデンティティ形成過程は一般人とははるかに異なり厳しい環境の中でなされるということになる。したがって、アスリートのアイデンティティ再体制化の困難さがそこにある。そして、キャリアトランジションにおいておこるアイデンティティ拡散の危機も深刻な問題としてある。特に、キャリアトランジションが競技の延長上（コーチ、フロント等）になく、豊田（1999）と本研究の事例のように、未経験（他の分野）の職種に就いた場合のそれが危惧される。さらに付け加えると、指導者やチーム力によって勝たされたアスリートと自分の努力で勝ってきたアスリートの違い、メジャー競技とマイナー競技の違い等も影響してくると考えられる。

6. まとめ

本研究は、競技引退に伴うキャリアトランジションにおいて、豊田（1999）の事例研究の検証と元アスリートがどのようなプロセスでアイデンティティ再体制化を行ったのかを1）競技引退に伴うアイデンティティ再体制化のプロセス、2）社会化予期と時間的展望について、3）競技引退がその後の職業期危機に与えた影響、という3点について明らかにし、アスリートという極めて特殊な環境でのアイデンティティ形成とその再体制化の困難さと必要性を考察した。

1）競技引退に伴うアイデンティティ再体制化のプロセスについては、豊田（1999）の事例では、キャリアトランジションがスムーズにいても、充分課題解決に至っていないのに比べ、本研究の場合、①危機がキャリアトランジション後2年以内に訪れたこと、②女性であること、③形態は違いますが元の競技に関わられたこと等の要因でアイデンティティ再体制化がなされたということが考察された。

2）社会化予期と時間的展望については、社会化予期がなされても、時間的展望が甘いと、次の

生活へのトランジションがスムーズにいかず、アイデンティティ再体制化の必要性が比較的早い時期に訪れることが考察された。

3) 競技引退がその後の職業期危機に与えた影響については、豊田(1999)の事例研究が、いずれも50歳代の元アスリート(男子)のものであり、本研究の事例は30歳代のアスリート(女子)であることから、本研究からの検証は不可能と判断された。しかし、両事例研究から、競技引退がその後の職業期危機に与えた影響については、競技期間中におけるアスリートのアイデンティティ確立の心理・社会的背景(性差、投入の個人差、種目、競技実績、競技の知名度等)とトランジションに伴う社会化予期・時間的展望が密接に関係していることが考察された。

これらの結果から、アスリートのキャリアトランジションに伴うアイデンティティ再体制化は、アスリートがアイデンティティを形成する過程の特殊性と相まって、その難しさが考察される。一方、アイデンティティを形成する過程での比類なき自信が、次なる発達課題にポジティブに対応でき、アイデンティティ再体制化が比較的容易になされることも考察された。これらを、生涯発達心理学視点から捉えれば、各発達段階がそれぞれ好ましい形で成し遂げられる中で、アスリートの場合、特にアイデンティティ形成が大切であることを示唆しているといえよう。

アスリートのキャリアトランジション研究の現状については、日本スポーツ心理学会第33回大会(沖縄県)において、高橋潔(神戸大学大学院教授)はキャリア心理学の必要性を、田中ウルヴェ京(日本大学医学部講師)は国内外のキャリア関連の現状についてのシンポジウムで発表している。また、小林一光(プルデンシャル生命保険株式会社)はアスリートの心理スキルは、ビジネスでも大いに利用できると主張している。

また、キャリアトランジションへの実際的な取り組みとしては、Jリーグキャリアサポートセンターの活動が特筆されよう。

最後に、以下を付記する。アスリートや元アスリートには、結果や良識ある人間的行動を求められるという、社会的期待と責任があることを忘れてはいけない。例えば、現代日本で稀有化しつつある家族の絆に対して警鐘を鳴らすかのように、あるボクシング一家の家族愛がマスメディアに取りざたされていた。しかし、敗戦とそれに伴った反則行為、ならびにその後の対応にマスメディアの激しいパッシングがあったことで周囲の耳目をあつめた。トップアスリートになろうとする子供たちとアスリートを育てようとするコーチとしての父親の教育理念と人格的資質が問われた事象といえる。一方、中田英寿氏は、引退宣言から494日、世界108都市を旅する中で、最近アジアを中心に旅を続け、児童養護施設などを訪問し、貧困や環境面の世界の問題を目の当たりにしてきた。そこで氏はノーベル平和賞を受賞したグラミン銀行(バン格拉ディッシュ)のように、ビジネスとしての社会活動に乗り出す意思を明かした。(月刊誌クリエイト・ジャポン、講談社2009年12月号、11月10日発売より)

(こじま・かずお 社会福祉学科)

[謝辞]

本研究に当たり、多大なる助言していただいた筑波大学体育系教授、中込四郎先生と、びわこ成

蹊スポーツ大学准教授、豊田則成先生に深く感謝いたします。

注

注1) モラトリアム (moratorium) : 現在, 危機の最中にあり, 自分らしさを求めて積極的関与しているタイプ。いくつかの選択肢に迷っているところで, その不確かさを克服しようと一生懸命努力している。(豊田則成 1999年より)

注2) アイデンティティ拡散 (identity diffusion) : 危機前と危機後の2タイプに分類されるが, いずれも積極的関与が認められないタイプ。つまり自分が何者であるか特定できない状態。(豊田則成 1999年より)

注3) 場理論 (field theory) といえは, 一般的にレヴィン, Kの理論をさす。彼の理論の特徴は, パーソナリティは環境から孤立した静態的なものではなく, 常に環境と力学的に関連して働くことを強調した点と, 人の構造は固定し, 静止したものではなく, 発達的にもその時々的事態によって変化する動的な構造であるとした点である。

注4) 社会化 (Socialization) とは, 潜在的可能性をもって生まれた人間が, 社会すなわち具体的なさまざまな集団の文化を内面化し, 共同生活を営めるようになることを言う。それは生涯にわたって継続する。

参考文献

Crook, J. M. & Robertson, S. E. (1991), Transition out of elite sport. *International Journal of Sport Psychology*: 22: p. 115-127

エヴァンズ: 岡堂哲雄, 中園正身訳 1981年 エリクソンは語る—アイデンティティの心理学—新曜社 p. 34~48 <Evans. R. I. (1967) Dialogue with Erik Erikson. Harper & Row, Publishers, Inc., New York>

エリクソン: 小此木啓吾訳編 (1973) 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル—. 誠心書房: <Erickson, E. H. (1959) Identity and the life cycle. Psychological Issues, No. 1. International Universities Press>

遠藤辰雄編 1981年 アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版

岡堂哲雄 1981 エリクソンは語る—アイデンティティの心理学— 新曜社 p. 147~175

小島一夫 2004年 現代社会における幼稚園教育についての教育社会学的一考察 つくば国際短期大学紀要 第29・30合併号 p. 1~11

小島一夫 2005年 現代日本社会における家族の研究 つくば国際短期大学紀要 第31号 p. 103~116

小島一夫 2006年 中学校における運動部活動が社会化に及ぼす影響と意義 つくば国際短期大学紀要 第32合併号 p. 41~50

高橋潔 2007年 Jリーガーがピッチを去るということ 「Business Insight No.59」現代経営学研究所 p. 4~21

- 富田正利編著 1997年 人を育てる心理学 北樹出版 p.136～138
- 豊田則成 2007年 元アスリートが語る「人生の物語」[Business Insight No.59] 現代経営学研究
所 p.22～35
- 豊田則成 2001年 競技引退に伴う心理的問題と対策 体育の科学 第51巻 第5号 p.368～373
- 豊田則成 1999年 アスリートの競技引退に伴うアイデンティティ再体制化に関する研究 スポー
ツ教育学研究 第19巻 第2号 p.117～129
- 豊田則成・中込四郎 1994年 競技引退における「同一性再体制化」のタイプとその特徴—元学生
競技者を対象として— 日本体育学会第45回大会号
- 豊田則成・中込四郎 1996年 運動選手の競技引退に関する研究：自我同一性の再体制化をめぐっ
て 体育学研究 第41巻第3号 p.192～206
- 豊田則成・中込四郎 2000年 競技引退に伴って体験されるアスリートのアイデンティティ再体制
化の検討 体育学研究 第45巻 第3号 p.315～332
- 中込四郎 1993年 危機と人格形成 道和書院 p.189～216
- 中込四郎 2004年 アスリートの心理臨床 道和書院 p.67～72

A case study on ego identity reconfirmation in the career transition of an athlete :
From the viewpoint of the life-span development psychology

Kazuo Kojima

The purpose of this case study were analyze of ego identity reconfirmation in the career transition of an athlete, to identify the role of anticipatory socialization and time perceptive in the process, and to examine the effect of retiring experience for the transitional crisis. In addition, this study had another purpose to inspect Toyoda / Nakagomi(1996), Toyoda(1999). Subject was a former Champion of all Japan who had experienced the transitional crisis. Several semi-structured interviews were done to her. The following 4 points were suggested: 1)Five stages were found in the process of ego identity reconfirmation in the career transition. 2)Anticipatory socialization encouraged to transfer to the next stage of life, and time perspective was a major indicator for the degree of resolution of the developmental tasks in ego identity reconfirmation. 3)Solved tasks with ego identity reconfirmation on the career transition is brought up again. 4)It being very likely that athletes meet with a crisis when they do transit for another work irrelevant to a competition.

Key words: career transition, life span development, identity reconfirmation

本研究は、エリクソン（1959）の「アイデンティティ形成は、青年期に始まり終わると言うものではなく（中略）その大半が一生涯を通じて続く無意識的な発達プロセスである」の理論に基づいた生涯発達心理学の視点に立って、ライフサイクルの中で現役を引退し、キャリアトランジションすることが、あるアスリートにどのような意味を持ち、そして、どのような引退後の適応過程を辿ったかを元アスリートへのインタビューをもとにアイデンティティ再体制化の過程について豊田・中込（1996）、豊田（1999）の仮説の検証と考察を（1）競技引退に伴うアイデンティティ再体制化のプロセス、（2）社会化予期と時間的展望について、（3）競技引退がその後の職業期危機に与えた影響、という3点に絞って行った。そこから以下の4つの点が推察された。

- (1) 競技引退に伴うアイデンティティ再体制化のプロセスにおいては5つの過程がある。
- (2) 社会化予期と時間的展望については事例により異なる。
- (3) 競技引退がその後の職業期危機に与えた影響については、競技期間中におけるアスリートのアイデンティティ確立の心理・社会的背景（性差、投入の個人差、種目、競技実績、競技の知名度等）とトランジションに伴う社会化予期・時間的展望が密接に関係している。
- (4) アスリートのキャリアトランジションはアイデンティティを形成する過程の特殊性と相まって、その難しさがある。

キーワード：キャリアトランジション、生涯発達心理学、アイデンティティ再体制化